

馬獣医のよもやま話②⑧ 伊藤 克己獣医師

馬ロタウイルス感染症について

荻伏診療所 伊藤 克己

今年の繁殖シーズンも終盤戦となり、いよいよ来月からは1歳のセリが始まりますが、今回は子馬の感染性下痢症（腸炎）の一つであります、馬ロタウイルス感染症についてお話したいと思います。

馬ロタウイルス感染症とは？

馬ロタウイルス感染症とは、ウイルスの感染により子馬に急性の下痢症を引き起こす病気で、子馬の下痢症の約30%はロタウイルス感染によるものであると言われています。日高地方では5月から8月の間の発生が多く、特にこれからの牧草収穫の暑い時期に多発します。発症月齢は生後直後から4ヶ月齢の間で、特に1ヶ月から3ヶ月齢の子馬で多発し、発症した日齢が早いほど重症化しやすいと言われています。

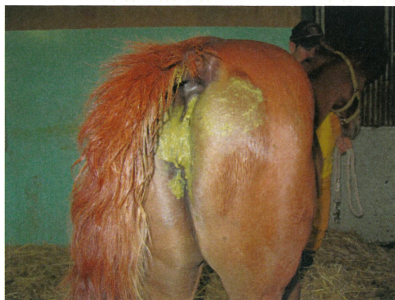
感染経路

ロタウイルスの感染は経口的に起こります。感染した子馬の糞便中には大量のウイルスを含むため、糞便の付いた寝藁や長靴なども感染源となり、消毒されなければウイルスは数日間感染性をもったまま生存することができます。

症状

子馬がロタウイルスに感染すると、泥状から水様性の下痢を発症し、その下痢便は褐色あるいは灰白色（いわゆる白痢）で悪臭を伴います。39～40℃の発熱が見られる場合もあります。食欲は減退し、まったく哺乳しなくなる場合もあります。下痢は軽症なもので2～3日、重症なものでは10日以上続く時もあります。腸管内にガスが多量に発生した場合、一時的に激しい疝痛症状を示すこともあります。

ロタウイルス感染症は合併症を伴わなければ症状は急速に回復し予後も良好ですが、**胃潰瘍を併発し、その症状が進行すると胃穿孔（胃に穴があくこと）を起こし死亡する場合があります。**



ロタウイルス感染による下痢（いわゆる白痢）

検査法

馬ロタウイルス感染症の検査法の一つとして、ヒト用の簡易検査キット（ディップスティック栄研ロタ、栄研化学）が使用されています。この検査は少量の糞便を検査材料とし、数分で検査結果が出ますので、牧場診療においてロタウイルス感染症の迅速な診断が可能です。

予防と治療

予防には、妊娠馬に不活化ワクチンを接種する方法があります。このワクチンは分娩予定日の2ヶ月前と1ヶ月前に計2回接種することで、分娩後の初乳を介して子馬に免疫抗体を移行させるもので、たとえ発症しても大幅に症状は軽減します。

ロタウイルス感染症が発症した場合は、厩舎内の感染蔓延を防ぐために、その馬房は消毒し、寝藁は他の場房に混入しないようにしましょう。また、感染子馬の馬房にはゴム長靴で入り、馬房から出る際には必ず消毒し、感染子馬を取り扱う時は使い捨てのゴム手袋を使用して、使用した手袋は直ちに廃棄しましょう。消毒には塩素系の消毒剤（ビルコン、クレンテなど）が有効です。

治療は水様性の下痢で脱水が著しい場合はリンゲル液の輸液（点滴）を行い、2次的な細菌感染予防の目的で抗生剤の投与も行います（ロタウイルス自体には抗生剤は効きません）。また、正常な腸内細菌のバランスを保つために乳酸菌製剤の経口投与も行います。

症状の項で述べたように、胃潰瘍を併発し胃穿孔により死亡する場合がありますので、**オメプラゾール（ガストロガード）の投与による胃潰瘍の予防は必須です。**



馬ロタウイルス不活化ワクチン

これからの暑い時期は、ロタウイルス感染症の多発時期となりますが、発症した場合は**胃潰瘍の予防は忘れず**に行ってください!!